「家族戦略」研究の可能性

－概念上の問題を中心に－

田 渕 六 郎

〔要約〕

近年の歴史学、人類学、社会学の各分野における家族研究においては、「家族戦略」という概念を採用する研究が多く見られる。それは、従来の家族ないし世帯研究が、家族の受動的・非合理的側面を過度に強調していたことの反省に立ち、家族が環境に対して能動的・合理的に対応する側面を考察しようとする理論的意図を持つ。

そのような概念を用いた研究は、戦略という概念を慎重に考慮して使用するのであれば、家族の諸行動の説明において様々な興味深い視点を提示すると同時に、社会学の他分野の理論的発展にも資するであろうゆえ、有益であると思われる。今後の家族社会学においては、家族の「適応」の側面を重視してきた家族ストレス論の知見などを踏まえつつ、家族戦略研究を理論的に体系化していくことが、一つの重要な課題になるだろう。

〔キーワード〕

家族戦略（family strategy）、世帯戦略（household strategy）

はじめに

家族研究においては、家族のミクロ的側面を重視する小集団論的な研究と、家族外部の他の社会制度と家族との関連というマクロ的な側面を重視する研究とが、相互に影響を与えつつ併存してきた（田渕, 近刊）。しかし、筆者のみるところ、両者の視角を踏まえた理論的な統合は、充分になされてきたとは言いがたい。その理由は、システムとしての家族が持つ特性と、個々の社会体系との

間の相互連関との関係を明確にするという問題意識が弱かったことに求め得るだろう。

社会制度と家族との関係については、例えば「経済」体系と家族との関係については、産業化論などの文脈のもとに、家族研究でも多くの研究が存在してきた。だが、この分野における従来の研究は、特に社会変動と家族変動との関連の追求という枠組みの中で、マクロレベルでのデータを主として利用しつつ、「経済」の在り方がどのように家族に影響を与えるのか、ということを主たる検討課題としてきたのであった（森岡，1972；平野，1994）。そのような研究志向の背後には、家族は諸制度に拘束された受動的な存在であるという考えが存在してきたものと思われる。

それに対して、今日の家族研究には、家族ないし世帯がどのような「戦略」的行動をとるか、という問題設定を採用するなかで、家族の積極的ないし主体的な側面を考察しようとする流れがあり、それはこれまでの家族研究に大きな軌道修正を迫らずにはおかない性質のものであると考えられる。

本稿の目的は、家族戦略という概念とそれを踏まえた研究が家族研究に対して持つ意義を、概念的・方法論的レベルで検討することにある。まず、先行研究の紹介・整理を通じ、世帯戦略という概念がどのような意義を持つものとして使われてきたかを確認する（1）。次に、「家族戦略」概念の使用に関して若干の理論的な検討を行い、その問題点と意義とを考察する（2）。議論の中心は2に置かれることになる。

1．家族研究における家族戦略の概念

本節では、家族戦略に関わる先行研究を、便宜的に家族史研究とその他の分野に分けて整理、紹介する。ちなみに以下に見る研究の全てが「家族戦略」family strategy / strategiesという概念そのものを用いているわけではなく、そのような用語を全く用いていない研究も見られる。ここでそのような研究にも言及するのは、そうした概念を用いているかということよりも、「家族戦略」的な視点を採用しているかどうかが、ここで検討する先行研究の取捨選択の基準として重

要であるからだ。

それでは「家族戦略」的な視点とは何か。これについては、後で指摘する論点でもあるが、「家族行動の能動的・合理的な側面を強調する」、という点にそのメルクマールを求めてよいと考える。ただし、以下で紹介するのはその中でも他の研究に対して大きな影響を与えたと考えられるものに限られる。その限りで、本稿は家族戦略研究の包括的レビューではない。本稿の課題は世帯戦略研究の「理論的」な意義を確認する作業を行うことであり、先行研究が提示してきた事実や具体的論点の詳細な検討を行うことが目的ではないことから、こうした選択的検討は許されるだろう。

家族史研究における家族戦略概念

ある論者の要約を借りれば、家族史の分野においては、主として世帯経済の研究が、「現在の自分たち自身のために、また、ある種の状況下では、未来の自分たち自身と自分たちの子孫のために、通常の生活水準を維持しようとする家族構成員によって取り入れられていた、しばしば無意識的な「戦略」(strategies)を、その中心概念として採用して」きた(Anderson,1980 = 1988 : 110)。

具体的な研究における嚆矢としては、アンダーソンのそれを挙げることができる(Anderson, 1971)。そこでは明示的に「戦略」の概念が採用されていたわけではないが、家族の世帯構造の変化が、諸成員にもたらす様々な便益との関連で説明されているのは、家族戦略概念を用いるのと同様の方法論であると見てよい(Morgan,1989)。具体的には、例えば、彼の分析対象となった工業化期のある都市において親子の同居が進んだのはそれが親子双方に便益をもたらしたためである、というそれまでにない解釈を提示したことは、その史料操作の方法とともに、その後の家族史研究に大きな影響を与えた。

アンダーソン自身の採る理論の特徴は次のような言明に顕著に見て取ることができるだろう。

「われわれが親族関係パターンにおける多様性や変化を理解しようとするならば、唯一の有効な接近方法は、一つの親族関係パターンを維持することによってある家族構成員が得る様々な利益や不利益を、意識的かつ明示的に吟味することである。」(Anderson,

1972＝88：205.下線による強調は田渕、以下同様）

彼以前の家族研究（特にチャヤーノフ以降の小農研究）や歴史人口学の方法との比較や影響関係の検討は本稿の課題を超えているが、ごく大まかにいって、この見解は、例えばアリエス以降の多くの「近代家族論」の主張者が、パーソンズを始めとする社会学者達が採用してきたような、産業化に対する「核家族化」の機能的適合関係を、マクロのレベルでのほぼ自明の前提として受けとめていたことと比較すると、それをミクロのレベルにおける合理的な考量の帰結として解釈しようとする点で、それまでの家族史研究の主流の説明とは異質な説明を試みるものであったと言えるだろう（Mount, 1982）。いうまでもなく、こうしたアンダーソンの見解は、今日社会学理論のなかでも評価が進みつつある合理的選択論の枠組みに依拠するものと見ることができる（盛山，1997）。

さて、こうした合理的選択論の系譜とは別の系譜から家族戦略概念につながる理論を提示してきたのが、ブルデューであった。彼の研究を家族史に分類するのは恣意的に見えるかもしれないが、家族史研究への影響を考慮してここで扱いたい。特に、Béarn地方での調査を基礎に、「ハビトゥス」habitusの概念を提示しつつ「結婚戦略」stratégies matrimonialesについて論じた彼の初期の論文が重要である（Bourdieu, 1972；Anderson, 1980；Segalen, 1981；丸山，1986；Bourdieu, 1987）。

ブルデューは、自身の論文のなかで、結婚戦略について厳密な定義を下しているわけではない（また、結婚戦略以外にも、出生戦略、相続戦略等の「戦略」概念を提示している）が、それは、リネージと労働力を再生産することを役割とする、子どもの結婚相手の選択に際して家族ないしその家族を含む親族集団によって採られる行動の指針であると見なされている（Bourdieu, 1972）。彼の言明を引用しよう。

「…結婚が何らの理想的な規則に対する服従に基づいていたのではなく、ある戦略の結果として生まれたと仮定する非常に強力な根拠がある。その戦略は、特定の伝統が強固に内面化された原理を利用しつつ、意識的というよりも無意識的なやりかたで、その伝統に明示的に含まれている典型的な解決策のうちのどの解決策も、再生産することができるのだ。」（Bourdieu, 1972＝1976：120）

「結婚戦略は、少なくとも最も富裕な家族にあっては、常に「良縁」を結ぶことが目指されており、それもたんに結婚というばかりではなく、新しい関係の開設と結びついた経済的・象徴的利得が最大限になるよう目指されているのである。」(Bourdieu, 1980 = 1990 : 7)

行論との関係上ここで重要なのは、結婚戦略が家族の経済的、象徴的再生産を役割としている（その限りで「結婚をめぐる家族戦略」と呼ぶこともできるであろう）こと、更に、その戦略は「意識された」ものとは限らず、半ば無意識的になった実践的な行動原理を指すものと考えられていることであろう。もちろんこれは構造主義的親族理論への説得力のあるアンチテーゼとして提示されているのであるが、そのような文脈を抜きにしても、一見規定的縁組と見える婚姻が、実は経済的要因等の様々な要因を背景にして選択されているものであることを、データにある程度依拠しつつ示したことによって、家族が持つ主体的・合理的性格を強調したものであり、他の多くの論者に影響を与えたことは否定できない（Scott, 1982 ; Davidoff and Hall, 1987）。

さて、そのブルデューの婚姻戦略という概念に影響を受けつつ、「家族戦略」概念を明示的に用いて、その後の研究に影響を与えたのがルイーズ・ティリー Louise Tilly である。彼女は家族戦略という概念を、「個人や社会全体ではなく世帯が意志決定の単位としてそれに従って行動する「暗黙の原理」に関する一連の仮説として働く」ものと規定する（Tilly, 1979a : 138）が、その概念を採用することの方法上の意義は次のような点にある。

「戦略の分析は、観察可能な世帯の行動の規則性やパターンを導くような原理を発見することを試みる。…家族戦略に焦点を当てることは、体系的な分析を放棄することなく、歴史に不確定性 problematic 、意図性、不確実性を再び導入することである。それは一方で、大規模な構造変動に捕らえられた人々の無力さを暗黙のうちに受け入れることを拒否するとともに、他方で、人々の心をのぞき込もうとする、つまり心性や態度を研究しようとする試みも拒否する…。」(ibid : 138)

ここには、世帯の行動の合理的かつ主体的な側面を客観的資料から析出しようとする分析への展望が示されている。同論文の彼女の実証分析では、19世紀後半のフランスの幾つかの村の人口学的史料、自伝などを用いつつ、当時の労

働者家族が、家族としての生存を達成するために、環境に応じて、早婚、都市の賃金労働機会を求める季節的移動、多産を通じた世帯の働き手の増大等の様々な対処をしていたということを論じている。また同時に、戦略を追求する家族内には、世代間ないし夫婦間の争いが存在する場合もあり（子どもが早期からの労働を強いられるなど）、家族内の情緒的関係や権力関係は、家族の戦略そのものとは別に考察されるべきことが指摘されている（cf. Tilly, 1979b ; 1984 ; Tilly and Scott, 1978／1987）。

また、家族変動論の分野で家族戦略概念を用いた研究として、ハレーヴンのそれが知られている（Hareven, 1982）。彼女の研究では、親族が産業化初期の工場労働力供給におけるネットワークや重要な援助関係を形成していたこと、家族ないし親族が、個人が他に頼るべき保障がない初期産業化の状況下で、重要な資源プールとして機能したことが示されている。特に、個人の人生移行のタイミングが「家族の経済的戦略と相互依存性によって」（Hareven, 1982＝1990 : 266）規定されていたことの指摘が重要である。

「不安定な状況におけるもっとも確実な対応、すなわち家族員同士による相互依存の関係が、失業、仕事上の難問、また死亡といった出来事に対処するための、唯一の手段といってよかった。家族が経済的に行きづまらないためには、家族の全員が積極的に家計に参加することが何より大事であった。たとえ妻の家族外での就労が継続したものでなかったにせよ、その家計経済への貢献は何にもまして重要であった。世帯の構成や人生における移行のタイミングにみられるように、家族の存続は、一つの労働単位としての家族組織における臨機応変な対応、そして個人の好みよりも、一つの集合体としての家族の必要を優先させることがその基盤となっていたのである。」（ibid : 308-309）

さて、以上のような先駆的研究は、家族史研究における一つの大きな流れを生み出してきたと見てよい。すなわち、その流れが採用する方法の特徴は、結婚（世帯形成）、出産、労働、相続、移民（移住）などの諸家族行動を、当事者の合理的な利益計算の結果として理解しようとする立場である。このような立場を部分的にでもあれ採用する家族史研究（あるいは社会史研究）は数多く（Medick, 1976 ; Levine, 1977 ; Levi, 1985 ; Macfalane, 1986 ; Stockard, 1989 ;

Woolf, 1991 ; Rose, 1992 ; Bradbury, 1993 ; Janssens, 1993 ; 北村, 1994 ; Quataert, 1995 ; Elman, 1998 ; Wright, 1998)、既に評価を得た方法論として定着していると見てよい（Moch, 1987 ; Caldwell, 1982)。

他研究分野における家族戦略概念

ここでは他の研究領域における家族戦略研究を整理しておこう。特に重要であるのが、労働者世帯や貧困世帯における「生存戦略」survival strategiesや「世帯労働戦略」household work strategiesに焦点を当てた、現代的な世帯（労働戦略）研究である。だが、その紹介に移る前に、やや特殊な用法で戦略概念を使用しているジャック・グーディ Jack Goody の研究に触れておこう。

グーディは、歴史人類学的な大きな立場に立った多様な研究を展開しているが、家族・相続等の比較社会論的な方法による研究のなかで、「相続の戦略」strategies of heirshipという概念を用いて（cf. 落合, 1994)、ある社会が相続においてある制度を採用するとき、それが当該社会においてどのような環境に対応し、どのような合理性を持つものか、という意味で、氏族や部族を含む「社会」や、一部の階層において採用される戦略としての家族制度（の形成と維持）を問題にした（Goody, 1976 ; 1979 ; 1983 ; 1990)。例えばその概念はこのように使用されている。

「古代地中海の諸社会では、相続人のいない状態は、その地域で通用する広く行きわたった相続の諸戦略、すなわち、養子、内縁関係、複婚、後家の再婚（レビレート婚を含む)、の一つを用いることによって修復することができた。」(Goody, 1983 : 94-95)

このような意味での戦略概念の使用は、社会の再生産という要件に対して複数の解決法が存在することを示すことで、様々な制度や規範の非必然性、恣意性を明らかにするという効果を持つと言えよう。それは同時に、ミクロのレベルでの家族行動が複数の選択肢からの「選択」を行うことができるということを、観察者が推測していることを示す。ただし、このような戦略概念の用法はやや特殊であるので、以下の論述では触れていない。

次に、生存戦略としての家族戦略研究について見ておこう。この分野では、実に多くの研究が存在する。親族の利用に関するものでは、アメリカの黒人コミュ

ニティにおける親族の積極的活用を「生存戦略」の視点から理解した Stack（1974）の研究が有名である（cf. Rank, 1994）。

この研究も含め、1970年代前半から、「家族生存戦略」family survival strategies という概念を使用した研究が、地域的にはラテンアメリカを対象とする研究を中心に目立ち始める。そこでの意図は、従来の貧困研究を支配していた、例えばオスカー・ルイス Oscar Lewis などによる「文化」的説明への反論として、世帯が経済構造の「周辺」において、市場労働から排除されながらも、親族網の活用や拡大家族の形成などをも含めて、積極的な対処行動をしていることを示すことにあった（Schmink, 1984 ; Roberts, 1994）。

さらに、このような視点は、近年のマイノリティの家族・親族研究（Almaas, 1991 ; Neckerman, 1993 ; Angel and Tienda, 1982 ; 1984）や、第3世界諸国の家族研究にも引き継がれてきた（Goody, 1984 ; Campbell et.al., 1991 ; Mazur, 1991 ; Lardinois, 1992 ; Johnson, 1993 ; Selden, 1993 ; Whyte, 1993 ; Ram and Wong, 1994 ; 小井土, 1997）。また、「生存戦略」「世帯戦略」などの概念は、農村（家族）研究にも適用され、興味深い幾つかの研究を生んできた（Redclift, 1986 ; Clay and Schwarzweller, 1991）。

ただし、このような視点は、発展途上国や貧困世帯の研究に適用されただけではない。それは、経済学における家族行動への経済学的アプローチの適用とも相まって（Becker, 1981 ; Easterlin, 1980 ; Zelizar, 1985）、先進諸国においても、変化する環境に対する対処行動としての世帯行動の合理的性格を析出しようとする一連の研究を生んできた。この背後には、時代背景として、1970年代以降の先進国でいわゆる構造改革 restructuring が進行したなかで、雇用の不安定性が増大したこと、女性労働の拡大とともに世帯のなかに複数の稼得者、収入源が存在することが常態化してきたことなどを挙げることができるだろう（Roberts, 1991 ; Warde, 1990）。

そのような諸研究の中では、世帯戦略の概念を提示した英国の Pahl（1984）のそれが重要である。彼は主として「世帯労働戦略」household work strategies という概念を用いている（Pahl, 1984 ; Pahl and Wallace, 1985）。彼の研究の特徴は、様々な財を個人が獲得する手段は、雇用労働によりその対価として貨

幣やものを入手する、といった方法に限られないこと、家族内部の分業関係と多様な労働行為（自給的労働 self-provisioning など）とが交錯する場として世帯を捉え、世帯が自律的な動態を持つことを重視する点にある（Pahl, 1984：129-139, 313ff.）。それは、労働の概念を、生活者の現実を捉える上で役立つものとするために、インフォーマルな経済行為（金銭授受の形をとるとは限らない）や、家族や親族を通じた財の移動までをも含むものに拡張しようとする理論的な努力を伴っている（Tilly and Tilly, 1994）。その着眼は、インフォーマル経済への関心の増大を背景に（Portes et al., 1989；Harding and Jenkins, 1989）、複数の論者に影響をあたえ、様々な研究を生みつつある（Smith and Wallerstein, 1992；Morris, 1990；Mingione, 1994）。

最後に家族社会学における動向について見れば、諸環境要因に対する家族の戦略的対応を体系化しようとする努力をしている理論として、家族ストレス論がある（McCubbin et al., 1982；1983）。その枠組みは、何らかの危機的状況下で、対処に用いうる資源を利用しつつ、家族が、戦略的に適応していく過程を、「経済」的変数以外の多くの変数を用いて理論化しようとするものである。そこには既に、まだ個々の命題の積み重ねの段階ではあるが、文化的規範を有効に用いて資源を統御する可能性や、社会的サポートの利用など、様々な変数を取り込んだ理論枠組みが提示されている。

家族ストレス論は、「適応」adaptation という概念を用いて、家族というシステムが環境に対応する局面を取り出そうとしてきたが、理論的には、抽象概念を操作化可能な諸変数にするという、実証分析との接合の努力が見られた。例えばその枠組みを用いたエルダーの著名な研究の一節を見てみよう。

「剥奪家族が経済的維持の問題を解決しようとしたときに、その家族が利用できる適応の一般的方略 general lines of adaptation はつぎの二つである。一つは支出を削減させることであり、もう一つは新たな収入源や補助的収入源を作り出すことであった。剥奪状態が長びくと、新しい収入源が必要となる。それは、母親が働きに出ること、親族からの援助や下宿人からの下宿代、最後の頼みである公的扶助の三種である。」（Elder, 1974＝1986：63）

近年の理論的展開では、特に、家族の対処戦略 coping strategies；適応的対処

戦略 adaptive coping strategiesという概念を明示的に用いることにより、家族の対処行動の主体的要素を一般化された枠組みのもとで理解しようとする考え方が顕著になってきた（Moen, 1982 ; Burr, 1994; McCubbin and Patterson, 1983 ; Menaghan, 1983）。さらに、他の家族研究法と比較すると、心理学の影響が大きかったため、認知的な戦略（Burr, 1994 : 137ff.）なども戦略として扱われてきた点がもう一つの特徴と言ってよい。

以上、幾つかの分野における家族戦略研究を手短に整理した。家族史研究では「家族戦略」、社会学的研究では「世帯戦略」「対処戦略」という言葉が好まれるという相違があるものの、共通点を要約すれば、家族戦略研究の動向が示すのは、世帯ないし家族の持つ能動的、合理的な側面が、研究の関心対象になってきたということである（Morris, 1990 ; 坂井, 1992 ; 大橋, 1993 ; González de la Rocha, 1994 ; Roberts, 1994）。ここでは簡単にしか言及しなかったが、このような動向は、新家庭経済学など、経済学の家族分析が、家族行動を主体の合理的な行動として描き始めたという事態に多くの影響を受けている。以下では、これらの研究における一つの共通要素であると思われる、世帯の「戦略」的側面を強調することが持つ社会学上の理論的意義を検討しよう。

2．家族戦略概念の理論的意義

家族戦略概念の理論的な検討については、家族戦略概念に対する最終的評価については意見が分かれるが、既に幾つかの先行研究において行われている（Wallace, 1993 ; Crow, 1989 ; Morgan, 1989 ; Clay and Schwarzweller, 1991 ; Cornell, 1987 ; Folbre, 1987 ; Moch, 1987 ; Hareven, 1991 ; Knights and Morgan, 1990 ; Shaw, 1990 ; Wolf, 1991 ; Warde, 1990 ; Watson, 1990 ; Tilly, 1987 ; Saraceno, 1989 ; Schmink, 1984 ; Roberts, 1994 ; Morris, 1990 ; Moen and Wethington, 1992 ; 西野, 1998）。以下で筆者が論及する事柄は、屋上屋を架する感もあるが、家族戦略概念が、使用される頻度に比して概念規定が曖昧なままに放置されてきた、というある論者（Smith, 1987） の指摘する

状況は、現在でも大きくは変わっていないと思われる。ここでは、それらの議論の紹介ではなく、そこで指摘されてきた論点を念頭に置きつつも、「家族戦略」概念を用いることの意義と問題点を筆者なりに検討してみたい。

2-1．「戦略」研究における「主体」の復権

既に幾度か言及したように、家族戦略の概念を使用することの一つの重要な意義は、家族という主体が、マクロの諸変数の影響を被るだけの受動的な存在ではなく、それが主体的・能動的・自律的な行動を行いうることを、示すことにあった（Bourdieu, 1987 ; Smith and Wallerstein, 1992 : 3ff.)。これは「戦略」概念を用いた研究が持ついわばイデオロギー的な特色であり、個人、家族、組織など、どのような対象についての「戦略分析」であろうと指摘しうることである（Crow, 1989)。

この点に関して、戦略概念を採用することが社会（学）理論のうえでどのような意味を持つか考えておくことは無益ではない。既に示唆したように、構造主義的な説明様式に典型的に見られるような、個人の判断過程を捨象した分析に対して、戦略分析は、様々な現象が、諸個人の行う意味判断作用や、諸行為者間の交渉過程に媒介される側面を強調することで、構造概念の持つ決定論的・静態的側面を批判的に照射するものであると言えるだろう。例えばギデンズは、制度分析と戦略的行為分析とを区別しつつ、こう述べている。

「社会システムを戦略的行為によって構成されたものとして検討することは、行為者が社会関係において構造的要素－規則と資源－に依拠する様式を研究することにほかならない。戦略的行為においては「構造」は行為者が社会的出会いにおいて言説的意識と実践的意識を動員することとして現れる。」(Giddens, 1979 = 1986 : 86)

エスノメソドロジーを始めとして、近年の社会学において重視され始めた研究方法の多くは、社会過程のミクロな側面を重視することにより、従来のマクロ分析において看過されてきた、諸主体の織りなす社会の動的「過程」の持つ内実や意味世界の豊かさを捕らえようとしてきた。その限りで、戦略分析も、その道具立てが経済学に多くを借りていることを除けば、制度、構造、規範などを説明要因とした決定論的な理論に対して、主体の復権を意図するものである

と言えよう。そして、以下に見るような論点を念頭に置いた具体的な分析を通じて、社会学理論に貢献する余地は大きいと思われる。

ただし、理論の持つ志向は、理論の仮定する現実を実在する現実だと思いこむ危険を常に持つ。行為者が持つ能動的性格を強調することじたいが問題なのではないが、以下で見るように、「主体性」を過度に強調して、全てを行為者の「戦略」として解釈してしまえば、「主意主義」的な理論がかつて受けたのと同様の批判にさらされることになる。そのような危険に対して、観察者ないし理論家は常に注意する必要があろう。

2-2．「戦略」の概念の問題

家族戦略概念を採用する別の意義は、家族が従来非合理的ないし感情的な行動に関わる領域として考えられてきたことに対して、それが経済合理的かつ利害計算過程を内包するような行動の主体でもあることを、すなわち家族「戦略」の主体であることを強調する点にもある。しかし、そのような漠然とした主張では、特に実証分析においてこの概念（の使用）がどのような強みを発揮する（またはしない）のかが見えてこない。それゆえ、以下では、戦略概念の使用においては何が問題とされるのかを検討したい。

何が戦略であり、何が戦略でないのか？

従来の戦略概念の使用において、概念規定が十分になされてこなかったことは、そもそも何が「戦略」であり、何が「戦略」でないのか、という根本的な論点が明確にされなかったという事態を生んできた。以下では、まず戦略ないし「戦略的」という語をめぐる概念的および方法論的問題を論じたい。

そもそも戦略 strategy という語は、語源的に見ても軍事的文脈から登場している（strategos：指揮者）。今日の普通の用語法では、「企業戦略」などの言葉に代表されるように、他の行為主体との競争的関係、あるいは予測困難な環境を背景として要請される、主体に対して何らかの効用増加をもたらすような、熟慮に基づく行動プログラムを指すものとして用いられていると見てよい（Shaw, 1990；Knights and Morgan, 1990）。

さて、そのような用語法自体が、「戦略」が主体（集合的主体の場合、主体のうちの一部の行為者であることもあろう）の計算された熟慮に基づくことを示唆すると言える。そのような計算は、複数の選択肢からいずれかを選択することを通じた効用増加に対する合理的期待に基づいてなされるのであるから、学的に戦略という概念を用いる場合、そこには、戦略に導かれる選択行為が「合理性」（それがどのように定義されるにせよ）を持ち、かつそのような合理性を仮託しうる行為者が存在しなければ、概念的に不都合をきたすことになろう（Saraceno, 1989）[1]。別の言い方をすれば、観察者が「戦略」概念を用いることは、ある行為ないし行動を律するであろう原則に、それが、一定の価値ないし目的の点から見て、効用を最適化するかどうか、という評価基準を与えることである[2]。つまり、ある行動原理は、何らかの目的ないし価値に照らしてはじめて「戦略」と呼ぶことができる（と考えるべきである）ということだ。これは他の分野における「戦略」概念の使用との整合性を確保するうえでも、必要な考慮である[3]。

第2に、戦略概念を用いる場合、「時間」の次元を考慮することが妥当である。家族戦略は、例えばそれが長期的な家族の地位向上を目的とする場合（例えば、子供の教育への投資を通じた長期的な家族の再生産）と、短期的な生存戦略（この場合「目的」は最低生活水準の維持である）である場合とがあり、その2側面は、事実上は重なる場合もあるが方法論的には区別されるべきである（Schmink, 1984 : 91 ; Hareven, 1982）[4]。戦略という概念の特徴は、このように、時間次元において相対的に長期の未来を見越して行動をプログラムするという特質を記述することにある。また、時間次元の区別をすることで、後に見るような構造要因を踏まえた分析が、より意味のあるものになると思われる（例えば、経済環境の安定性の高低が戦略のありかたをどのように変えるかなどを分析することが可能になろう）。その限りで、住居購買決定など、長期の見通しを必要とする行為には、家族戦略の概念を用いた分析に馴染みやすいのに対して（Pickvance and Pickvance, 1994）、既に紹介した「生存戦略」という用語は、それが短期的ないし一時しのぎの対処行為を指すならば、戦略という名称を付すべきではないと考えるべきであろう（Redclift, 1986 : 220）。

以上、戦略概念が内包する属性として、合理性と時間次元という二つの点を指摘した。しかし、このような特徴付けは、同時に戦略の概念を用いた研究の問題点を示唆するものである。

まず第1に、最も重要な点として、戦略の主体が個人であったとして、その主体が持つ価値や目的は、その主体の持つ言説的な意識によって確かめられるのか、それとも、観察者が想定した価値や目的が、主体のそれと同じであると想定されるだけでよいのだろうか、という問題がある。これはまた、行為過程を規定する要因や行為の帰結について、当事者がどの程度まで認識していることが理論的に必要か、という問題でもある（Wallace, 1993 : 97）。さらに、主体が集団、ここでは特に家族や世帯であった場合には、さらに、集団としての家族の「目的」は誰の意識に準拠して測定しうるのかという問題も生じる（cf. 田渕, 1996）。

ここでは前者の問題についてのみ論じよう。結論的には、当事者の主観的な認識、ないしは言明に依拠することなしに「戦略」について論じることは、観察者による様々な解釈の乱立を招くため、望ましくないと思われる。一例を挙げれば、ベッカーの研究以来議論されてきた、妻が家事を分担するという性別役割分業は、ある解釈からすれば、それは世帯の効用を最大化するから合理的であり、戦略的に採択されていると推論できるが、別の解釈からすれば、それは伝統的な家父長的規範に追従した結果であると、同じくらい説得的に推論することもできる（Moen and Wethington, 1992 : 242）。後者の解釈では、他の選択肢（規範に違背すること）が当事者にとって非現実的であれば、それが戦略的に採択されたと考えるのは困難である。このような解釈上の対立は、恐らく当事者の言明を参照することなしに解決することはできないだろう。しかし、実際の多くの研究では、主としてマクロレベルのデータにおける行為者の属性間の相関関係などを根拠にして、そこから当事者の「意識」を推論する（すなわち戦略が存在することを「推論」する）というレベルにとどまっている（Tilly, 1979b ; Christopherson, 1994）。歴史研究の場合には、史料的制約がそうした推論を強いる場合もあろう（その際は「推論」であることを明示することが必要であろうが）。だが、現在を対象とする社会学的研究の場合、そのようなレベ

ルの分析にとどまることは許されないと考えるべきであろう。上で述べたように、そもそも戦略分析が当事者の能動的側面を強調するものであり、その概念の積極的な提唱者であるブルデュー自身、当事者の提示する言説への注目を通じてそのような概念を提起してきたという前史が存在する以上（Bourdieu, 1972)、戦略分析は、観察者の自己満足に終わらないためにも、主体が行為に付与する意味を分析し、当事者が現実に依拠する原則を発掘することから始めなければならない。実際、そのような「言説」を方法論的に重視する立場に立つ研究が近年幾つか見られるようになっている（Pile, 1991 ; Edwards and Ribbens, 1991 ; Maynes, 1992 ; Fernández-Kelly, 1994)。

第2に、論点を指摘するにとどめるが、特に家族や世帯の戦略という場合、家族行動がどのような意味で合理的かということを解釈する場合には、経済合理性に還元できないような様々な要因を考慮する必要が生じる（Warde, 1990)。既に幾つかの研究でも、一見経済合理的な行動がエスニシティ間の文化的な差異の規定を受けていることが示されたりしてきた（田渕, 1998 ; Angel and Tienda, 1982 ; Rosenbaum and Gilbertson, 1995 ; Fernández-Kelly and Garcia, 1989 ; Fernández-Kelly, 1994)。これは、解釈のうえで経済合理性という基準のみに頼ることの危険性を示唆すると同時に、既に述べたように、当事者の言説を参照することの重要性を示していると言えよう。

第3に、方法論上の問題として、そのような基準を満たすような戦略概念を、どのような指標で操作化し、測定するかという問題が生じる（Moen and Wethington, 1992)。具体的な研究を挙げれば、アンダーソンら（1994）は、当事者の意識を測定する上で、世帯戦略を単なる「世帯についての計画」などの言葉に置き換えてアンケート調査などを行っているが、これがどこまで理論レベルにおける「戦略」を測定するものであるかは、検討が必要であると思われる。

以上、戦略概念一般に関わる問題点を指摘したが、これは戦略概念が無効だということを主張するためではない。むしろ、例えばWatson（1990）が述べるように、戦略的行為という概念は、これまで「伝統的行為」などと分類されそれ以上の学的な検討対象にならなかった行為が持つ他の側面を分析可能にす

るという点で、非常に大きな可能性を秘めていると思われる。

家族戦略の「単位」

次に、家族戦略ないし世帯戦略という概念に関わる問題として、それが誰にとっての戦略か、という論点がある。ここでは、家族という集団を戦略の主体とすることが比喩以上の意味を持つのかという問題と、家族内部での権力関係の問題とを述べよう。

第1に、家族戦略の分析において、戦略の当事者は基本的に家族や世帯であるとされる。しかし、言うまでもなく、出産、結婚、相続、労働などのかたちで実際に行為するのは個人である。それゆえ、家族を戦略の主体として想定することは、比喩あるいは擬制以上の意味があるのか、という問いが生じうる（Smith, 1987）。つまり、戦略を持つのは（意思能力を持つ）個々の個人であって、世帯ではない、という批判が予想される。確かに、ブルデューの言うような家族の再生産戦略という概念使用においては、あたかも家格の維持などの目的が家族という大文字の主体に仮託されてきたかのように見える。例えばスコット（1982）の上層階級研究のように、あたかも社会的な再生産を目的とする「家族戦略」の主体が家族であるかのように見える場合もあろう。

しかしながら、家族戦略という概念は「諸個人が家族において追求する戦略」の簡略表現であり（Anderson et al., 1994 : 20）、実際に目的や戦略に従い行為するのは個人であるということは、複数の論者が指摘してきたという点は確認する必要がある（Bourdieu, 1987）。家族戦略概念は、そのような個人の諸戦略が、通常は日常的な共住や家計共同の単位である家族という場において、特に意思決定の過程で相互に密接な影響を与えつつ生起することを把握しようとするものである[5]。逆に言えば、世帯の効用関数を無批判に前提するような分析は社会学的とは言えないのであり、実際、家族ストレス論を見ても、家族と個人の戦略の相違は明示的に問題にされてきた（Menaghan, 1983）。例えば階層研究などにおいても、世帯内で個人が与え合う相互作用のために、個人単位で「階層」帰属を同定することには限界があるという指摘がなされているように、家族、世帯を理論的な分析の単位とすること自体が無意味であるわけではない。

むしろ、新古典派的な個人像を前提して、個人が全く自己利益に従って行動するという仮定を家族行動に持ち込んだり、逆に、個人が家族内では利他的にのみ行為すると考えたりすれば、多くの経済社会学的な分析が冒してきたのと同様の過ちを繰り返すことになろう（Granovetter, 1985）。「創発特性」などという概念を持ち出すまでもないが、家族戦略分析の背後にある認識は、家族戦略は決して「「ウェイト付けされた」個人の利害の集合体」（Folbre, 1987 : 115）には還元できないという想定である。そこでは、個人の利害は、個人が所属する他の集団（ジェンダー、階級、国家、地域）や社会関係との関連で決定され、諸家族員はそのような個別の利害を持ち、家族の中で戦略的に振る舞うこともあると考えるべきであろう。

第2に、家族内部の権力関係、具体的には、家族内部には意思決定過程や分配過程における不平等や抑圧などの権力関係が存在するという問題がある。行為選択の帰結である報酬が、「家族そのもの」に帰属するということはあり得ない。つまりそれは何らかの「分配」を経て始めて誰か（家長などの家族員）の利益となるわけである。このような理由から、世帯戦略という概念使用において、世帯が内的な利害分裂や権力関係を含まないかのように分析することには慎重さが必要であるという主張が、特にフェミニズム的な視点から出てくる（Wolf, 1991 ; Folbre, 1987）。

「貧者における世帯戦略は、…インフォーマルな都市環境の中で最も盛んであるのが常である。これらの対処戦略は、必ずしも合意に基づいていないし、不平等な作業分配に依存しているかもしれない。実際、対処戦略は、希少な資源をめぐる競争の結果からではなく、世帯サイクルの異なった段階に属することによるアスピレーションの違いを、また、世帯員の生活機会の相違を原因として、世帯間および世帯内部の分化の原因にもなるであろう。」（Roberts, 1991 : 141）

このような点は既に Tilly 自身も指摘していたことだが（1979a : 138）、家族史以外の諸研究においても、配分や労働力供給の不平等、また、それと関連する世帯内権力関係については、家父長制的な家族内部の権力構造下における女性の抑圧の問題を中心にして、実証的な分析のなかで指摘されてきた（Tilly and Scott, 1978 ; González de la Rocha, 1994 ; Wolf, 1992）。

この点に関しては、確かに家族戦略概念を無批判に使用する場合、家族内部の利害の不一致や不平等関係が等閑視されることがあることは事実だろうが、行論から明らかなとおり、概念装置としての家族戦略概念を採用する理論枠組みは、このような不平等関係を無視するわけではない。むしろ、分析単位を家族あるいは世帯に据える際に伴う問題点を常に留意しつつ分析を行うことで、家族戦略分析は、どのような要因が、ある家族員が家族の意志決定過程に他よりも大きな影響力を及ぼすことを可能にするのか、等の興味深い問題を検討することができると考えるべきであろう（Hareven, 1991）。

構造要因と行為の戦略性

最後の問題として、家族戦略分析は、上で見たように主体の能動性や自律性を強調するために、それが構造的な制約のもとにある行為をも戦略的なものであるかのように分析し、過度の主意主義に陥る危険を持つことが指摘されてきた（Knights and Morgan, 1990）。

しかし、それは決して構造的要因を軽視するものではない。むしろ、既に述べてきたことからも明らかなように、それはいわゆるマクロとミクロの接合を積極的に行おうとする理論的営為でもあるのだ。その意味で、その方法が社会学の理論的発展に資する可能性は小さくないと言えよう。

「構造」は個々の「行為」の過程においてのみ存在するわけだが、戦略分析は行為の主体の自由や行為の選択可能性のみを指摘するのではなく、そこにどのように構造的要素が制約として作用するかを問わねば戦略分析にはならないのである。

特に重要な点として、行為の戦略的側面を強調するなかで、行為選択における「選択」の余地を過度に強調してはならないということが指摘できる。つまり、構造的その他の制約を考慮することにより、理論的なバランスを確保する必要があるのである（cf. Granovetter, 1985）。これは、ある戦略が具体的な社会構造と、家族の置かれた資源制約の下にあることを考えれば、当然である。

家族戦略に関係する構造的な要因として社会学的見地からとりわけ重要であるのは、家族の利用しうる「資源」の布置状況と、「規範」とであろう（Cornell,

1987)。まず、家族が動員可能な資源について知ることは、「選択」を選択として理解するための必須条件であると言える。例えばブルデュー自身もこう述べている。

「婚姻を結ぶまでのゲームの勝負の結末は、次のものに依存している。一方では、対峙している家族が自由にできる物的・象徴的資本に。…もう一方では、それら戦略の責任者たちに、この資本を最もうまく利用するのを可能にする能力に依存する。」(Bourdieu, 1980 = 1990 : 76)

資源の中でも、構造的に規定された資源と、主体の努力によって動員しうる可能性を持ついわば「潜在的な」資源とを区別する必要があろう。前者に当たるのは階級的位置の差異などであるが、それは直接的あるいは短期的には主体の操作不可能なものである。後者に当たるのは、例えば親族的サポートなどであり、それを動員する主体的努力を伴って初めて資源として顕在化するものである。前者が拘束要因として働く側面を軽視する場合には、実際には選択不可能なものを選択可能なものとみなす錯誤をおかすことになり、観察者が、家族のあらゆる行動を「戦略」的なものと解釈する危険性を生む。

次に、規範については、それは「違背することで何らかの心理的サンクションを伴うような、明示的ないし暗黙の行動規則」であると考えられるが、従来の家族研究でそれが説明要因として果たす役割は少なくなかった。もちろん、規範が行動規制に寄与する役割を過小評価してはならないが、戦略研究の視点からは、規範をある程度相対化することも必要である[6]。その場合も、ある規範が当該主体から見てどのようなものと認識されているかが重要になる。この認識は、当然、マクロのレベルでの規範の変動を拘束要因とするのであり、ここでもまた構造的要因と主体的要因との相互の関わりが分析対象として重要になる。例えば、世帯戦略の研究においては、今日では、「市民権」という言説的意識を媒介にして国家からの給付を受けるという選択肢が拡大したため、それらを念頭に置かずに「家族の義務」family responsibility などの規範が世帯行動に与える影響を分析することは不可能になっている（Morris, 1990 ; Roberts, 1991 ; Finch and Mason, 1983)。

いずれにせよ、陳腐な結論ではあるが、家族戦略概念が、具体的現実を分析

することができる道具となるためには、戦略の置かれた構造的な文脈を充分に提示できるだけの資料が必要であると言わねばならない。逆に言えば、当事者の言説に依拠し、そうした言説に現れる当事者の理解をそのまま記述するだけでは、分析としては不十分なのであり、行為がおかれた構造的位置づけに関する分析を欠いた「戦略」分析は、空虚なものとなってしまうだろう。

まとめにかえて－社会学的な家族戦略研究の可能性

以上、家族戦略概念の持つ概念的・方法論的問題について検討してきた。本稿で検討しきれなかった論点も多い。特に、家族行動のあらゆる側面が家族戦略的な視点からの分析になじむものかどうかは、今後の検討に委ねざるを得ない。実のところ、家族社会学においても、家族に関連する様々な社会現象が人々の合理的な行為に媒介されていることについての認識は広まってきたとはいえ、それが社会学的に体系づけられた理論になっているわけではまだない。家族戦略研究は、冒頭でも述べたように、家族研究においてマクロ的研究とミクロ的研究とを統合する上で少なからぬ寄与ができると思われるが、体系的な分析を提示する準備がないため、ここでは、今後の筆者自身の展望を述べることができるだけである。

「社会学的」な家族戦略研究として、家族社会学におけるこれまでの蓄積が最も大きい分野は、家族ストレス論であろう。本稿での検討は、戦略という視角を採用する場合に当事者の持つ言説が重要性を持つことを示唆しているが、そのような言説の位置は、この理論の中では明確ではないように思われる。そもそも家族ないし世帯の主体的対応のプロセスに照準した家族戦略研究については社会学的な実証分析の蓄積が少ない現状から判断すると（Anderson and Kendrick, 1994）、個別事例の質的な分析例を増やすことを通じて、より妥当な理論的枠組みを模索していく作業が必要であろうと思われる。その場合、ともすれば「過程」を重視する研究が「法則」追求を無視した記述的モノグラフィーになりがちであるという点を鑑みて、アドホックに個別の現象説明を行うのではなく、通文化的に使用しうるような枠組みを構築することを、少なくとも理

論の形成段階では目指す必要があろう。

当事者の言説に関して、筆者は特に社会学固有の要因として、規範要因の重要性、特に当事者が自身の利害を正当化するために家族規範を「操作」する可能性（cf. Yanagisako, 1985 ; Becker, 1993 ; Finch and Mason, 1993）を考察すべきだと強調したことがあるが[7]、現時点ではまだそのような方法の有効性について適切な評価を下せる段階には到達していない。今後の課題としておきたい。

注

1）例えば、前掲のブルデューの引用における「経済的・象徴的利得が最大限になるよう」という言明では、利得の最大化が、行為を導く戦略の与件とされている。

2）やや些細な点を指摘しておこう。多くの文献において、戦略という用語をあたかも「目的合理的行為」ないし「経済合理的行為」と同じような意味で用いている例が見られる。しかし、戦略は具体的な「行為」そのものではない。戦略は、個々の行為と、何らかの価値ないし目的との間にあって、後者から前者を導出するための行為原則を指す概念として用いるほうが、概念的には明確である。それゆえ、「…戦略」「…する戦略」という用語法は、単なる「比喩」として断りをつけて使うのならば別だが、個々の行為そのものを指す用語としては適切ではない。何らかの戦略に従った行為、という意味で用いるのならば、「戦略的行為」などというように記すほうが、誤解は少ないだろう。

3）例えばゲーム理論における「混合戦略」や「しっぺ返し戦略」などの戦略概念は、あるゲームの規則の下で行為者の利得の期待値を最大化するような一連の行為規則を記述する概念として用いられている。一般的定義によれば、それは「プレイヤーの情報集合が与えられたとき、ゲームの各時点において、どのような行動を選ぶべきかをプレイヤーに述べるところの一つのルールである」（Rasmusen, 1989 = 1990 : 17）。

4）別の論者は、それらに対して「戦略」strategiesと「策略」tactics、「長期的にやっていくこと」making out　と「その日暮らしをすること」getting byという名称を与えている（Smith, 1987 ; McCrone, 1994）。

5）確かに、「世帯生存戦略」分析の多くが対象としてきた発展途上国などでは、世帯が個人にとって経済的セーフティネットとしての重要性が大きいという構造的背景があるた

め（Roberts, 1994)、家族（世帯）戦略という概念の適用の妥当性は、諸社会間で異なるという指摘があり得る。しかし、安定した経済状況や充実した社会保障制度を持つ社会における家族の研究において家族戦略概念が無意味であるとは必ずしも言えない。

6）特に家族研究において重視されてきた「規範」要因による説明が、しばしば同義反復的な説明になりがちであったことを考えれば、戦略概念を用いた研究は、「規範に従った行動」がまた社会学的な分析の対象になりうることを示すという点で、従来の視角では見落とされてきた様々な要因を取り込む可能性を持っている。

7）筆者はかつて現代日本の世代間関係を、世帯間の戦略的な援助関係として分析した。拙稿、『「資源」としての家族・親族－世代間援助関係を中心に』（1993年度東京大学大学院社会学研究科修士論文）を参照。

参考文献

Almaas, Reider（1991）'Ethnic Values and Survival Strategies among Norwegian-American Farmers', in Clay and Schwarzweller（eds.).

Anderson, M.（1980）*Approaches to the History of the Western Family 1500-1914*, The Macmillan Press.(北本正章訳、『家族の構造・機能・感情－家族史研究の新展開』、海鳴社、1988年)

Anderson, M.（1971）*Family Structure in Nineteenth Century Lancashire*, Cambridge UP.

Anderson, M.（1972）'Household structure in the industrial revolution: mid-nineteenth-century Preston in comparative perspective', in P. Laslett and R. Wall（eds.）, *Household and Family in the Past Time*, Cambridge UP,（浜野潔訳、「産業革命と世帯構造」、所収：斎藤修編著、『家族と人口の歴史社会学』、リブロポート、1988年）

Anderson, M., Bechhofer, F. & Gershuny, J.（eds.）（1994）*The Social and Political Economy of the Household*, Oxford UP.

Anderson, M., Bechhofer, F. & Kendrick, S.（1994）'Individual and Household Strategies', in Anderson, et al.（eds.).

Angel R. and Tienda, M（1982）'Determinants of Extended Household Structure', *American Journal of Sociology*, 87（6), pp.1360-1383.

Angel R. and Tienda, M. (1984) 'Household Composition and Income-Generation Strategies Among Non-Hispanic Whites, Blacks, and Hispanic-Origin Groups in the United States', in M. B. Brinkerhof (ed.), *Family and Work : Comparative Convergences,* Greenwood Press.

Anthony Giddens (1979) *Central Problems in Social Theory*, University of California Press. (友枝敏雄他訳、『社会理論の最前線』、ハーベスト社、1989年)

Becker, Gary S. (1981) *A Treatise on the Family*, Harvard UP.

Becker, G. S. (1993) 'Nobel Lecture: The Economic Way of Looking at Behavior', *Journal of Political Economy*, 101 (3).

Bourdieu, Pierre (1972) 'Les stratégies matrimoniales dans le système de reproduction', *Annales E. S. C.*, 4-5 (juillet-octobre), pp.1105-1125. (transl. by E. Forster, 'Marriage Strategies as Strategies of Social Reproduction', in R. Foster and O. Ranum (eds.) *Family and Society*, The Johns Hopkins UP. 1976. pp.117-144.)

Bourdieu, P. (1980) *Le Sens Pratique*, Minuit.(今村他訳、『実践感覚』2、みすず書房、1990年)

Bourdieu, P. (1987) 'de la règle aux stratégies', in *Choses dites*, Les Éditions de Minuit, pp.75-93. (石崎晴己訳「規則から戦略へ」、所収：『構造と実践』、藤原書店、1988年、96-122頁)

Bradbury, B. (1993) *Working Families*, McClelland and Stewart.

Burr W. R. et al. (1994) *Reexamining Family Stress*, Sage.

Caldwell, John (1982) *Theory of Fertility Decline*, Academic Press.

Campbell, D. J., Zinyama, L. M. & Matiza, T. (1991) 'Coping with Food Deficits in Rural Zimbabwe : The Sequential Adoption of Indigenous Strategies', in Clay and Schwarzweller (eds.).

Christopherson, S. (1994) 'Bargaining and Balancing : Women's Waged Work as an Adjustment Strategy in U.S. Households', in A. Kobayashi (ed.), *Women, Work and Place*, McGill Queen's UP.

Clay, Daniel and Schwarzweller, Harry K. (1991) 'Introduction : Researching Household Strategies', in Clay and Schwarzweller (eds.).

Clay, D. and Schwarzweller, H. K. (eds.) (1991) *Household Strategies* (*Research in Rural Sociology and Development*, Vol.5.), JAI Press.

Cornell, L. L. (1987) 'Where Can Family Strategies Exist?', *Historical Methods*, Vol. 20, No. 3, pp.120-123.

Crow, G. (1989), 'The use of the concept of 'strategy' in recent sociological literature', *Sociology*, Vol.23, No.1, pp. 1-24.

Davidoff, L. and Hall, C. (1987) *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*, The Univ. of Chicago Press.

Davidson, Andrew P. (1991) 'Rethinking Household Livelihood Strategies', in Clay and Schwarzweller (eds.).

Davis, Deborah and Harrel, Steven (eds.) (1993) *Chinese Families in the Post-Mao Era*, University of California Press.

Easterlin, R.A. (1980) *Birth and Fortune: The Impact of Numbers on Personal Welfare*, The Univ. of Chicago Press.

Edwards, R. & Ribbens, J. (1991) 'Meanderings around 'Strategy' : A Research on Strategic Discourse in the Lives of Women', *Sociology* Vol.25,No.3, pp. 477-489.

Elder, Glen H. Jr., (1974) *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, The Univ. of Chicago Press.（本田時雄ほか訳、『大恐慌の子どもたち』、明石書店、1986年）

Elman, C. (1998) 'Intergenerational Household Structure and Economic Change at the Turn of the Twentieth Century', *Journal of Family History* 23 (4), pp.417-440.

Elster, Jon. (1983). *Sour Grapes,* Cambridge UP.

Farber, B. (1966) 'A Research Model: Family Crisis and Games of Strategy', in Farber (ed.) *Kinship and Family Organization,* John Wiley and Sons.

Fernández-Kelly M. P. and Garcia, A. M. (1989) 'Informalization at the Core : Hispanic Women, Homework, and the Advanced Capitalist State', in Portes et al. (eds.)

Fernández-Kelly M. P. (1994) 'Towanda's Triumph: social and cultural capital in the transition to adulthood in the urban ghetto', *Journal of Urban and Regional*

Research, Vol.18, No.1, pp.88-111.

Finch, J. and Mason, J. (1993) *Negotiating Family Responsibilities*, Routledge.

Folbre, N. (1987) 'Family Strategy, Feminist Strategy', *Historical Methods*, Vol. 20, No. 3, pp.115-118.

González de la Rocha, Mercedes (1994) *The Resources of Poverty*, Blackwell.

Goody, J. (1976) *Production and Reproduction : A Comparative Study of the Domestic Domain*, Cambridge UP.

Goody, J. (1978) 'Inheritance, property and women : some comparative considerations', in J. Goody, J. Thirsk and E.P.Thompson (eds.), *Family and Inheritance,* Cambrdge UP.

Goody, J. (1983) *The Development of the Family and Marriage in Europe,* Cambridge UP.

Goody, J. (1990) *The Oriental, the Ancient and the Primitive,* Cambridge UP.

Goody, Ester (1984) 'Parental Strategies: calculation or sentiment?: fostering practices among West Africans', in Hans Medick & David Warren Sabean (eds.), *Interest and Emotion: Essays on the study of family and kinship*, Cambridge UP.

Granovetter, Mark. (1985) 'Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness', *American Journal of Sociology* 91 (November), pp.481-510.

Harding, P. and Jenkins, R. (1989) *The Myth of the Hidden Economy*, Open University Press.

Hareven, Tamara K. (1982) *Family Time and Industrial Time*, Cambridge UP. (正岡寛司監訳、『家族時間と産業時間』、早稲田大学出版部、1990年)

Hareven, T. K. (1991) 'The History of the Family and the Complexity of Social Change', *American Hitorical Review* Vol.96, No.1, pp.95-124.

Janssens, Angelique (1993) *Family and Social Change: The household as a process in an industrializing community*, Cambridge UP.

Johnson, Graham E. (1993) 'Family Strategies and Economic Transformation in Rural China: Some Evidence from the Pearl River Delta', in Davis and Harrel (eds.).

Knights, D. & Morgan, G. (1990) 'The Concept of Strategy in Sociology: A Note of

Dissent', *Sociology* Vol.24 : No.3, pp. 475-483.

Lardinois, R. (1992) 'Family and Household as Practical Groups: Preliminary Reflections on the Hindu Joint Family', in K. Saradamoni (ed.) *Finding the Household: Conceptual and Methodological Issues*, Sage .

Levi, Giovanni (1985) *L'ereditá immateriale*, Einaudi. (transl. by Lydia G. Cochrane, *Inheriting Power: The Story of an Exorcist*, The University of Chicago Press 1988)

Levine, David (1977) *Family Formation in an Age of Nascent Capitalism*, Academic Press.

Macfalane, Alan (1986) *Marriage and Love in England 1300-1840*, Basil Blackwell.

Maynes, M. J. (1992) 'The Contours of Childhood: Demography, Strategy, and Mythology of Childhood in French and German Lower-Class Autobiographies', in J. R. Gillis et. al. (eds.), *The European Experience of Declining Fertility, 1850 -1970*, Blackwell.

Mazur, Robert E. (1991) 'Rural Household Strategies in Zimbabwe and Mali: Labor Allocation and Migration', in Clay and Schwarzweller (eds.).

McCrone, D. (1994) 'Getting By and Making Out in Kirkcaldy', in Anderson et al. (eds.).

McCubbin, H. I. et al. (eds.) (1982) *Family Stress, Coping, and Social Support*, Charles Thomas.

McCubbin, H. I. et al. (eds.) (1983) *Social Stress and the Family*, The Haworth Press.

McCubbin, H. I. and Patterson, J. M. (1983) 'The Family Stress Process: The Double ABCX Model of Adjustment and Adaptation', *Marriage & Family Review* Vol. 6, Nos. 1／2, pp.7-37.

Medick, H. (1976) 'Zur Strukturellen Funktion von Haushalt und Familie im Übergang von der traditionellen Agrargesellschaft zum industriellen Kapitalismus: die proto-industrielle Familienwirtschaft', in W. Conze (ed.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*, Stuttgart. (馬場哲訳、「伝統的社会から産業資本主義への移行における世帯と家族の構造的機能－プロト工業的家族」、所収：篠塚信

義ほか編訳、『西欧近代と農村工業』、北海道大学図書刊行会、1991年）

Menaghan, E. G. (1983) 'Individual Coping Efforts and Family Studies: Conceptual and Methodological Issues', *Marriage & Family Review* Vol.6, Nos. 1／2, pp.113-135.

Mingione, Enzo. (1994) 'Life strategies and social economies in the postfordist age', *International Journal of Urban and Regional Research*, Vol.18, No.1, pp.24-45.

Moch, L. P. (1987) 'Historians and Family Strategies', *Historical Methods*, Vol. 20, No. 3, pp.113-115.

Moen, Phyllis. (1982) 'Preventing Financial Hardship: Coping Strategies of Families of the Unemployed', in McCubbin et al. (eds.).

Moen, P. & Wethington, E. (1992) 'The Concept of Family Adaptive Strategies', *Annual Review of Sociology*, Vol.18, pp.233-251.

Morgan, D. H. (1989) 'Strategies and Sociologists: A Comment on Crow', *Sociology*, Vol.23, No.1, pp. 25-29.

Morris, Lydia (1990) *The Workings of the Household*, Polity Press.

Mount, Ferdinand (1982) *The Subversive Family*, The Free Press.

Neckerman, Kathryn M. (1993) 'The Emergence of"Underclass"Family Patterns, 1900-1940', in Michael Katz (ed.), *The"Underclass"Debate*, Princeton.

Netting, R. M., Wilk, R. & Arnould, E. (eds.) (1984) *Households: Comparative and Historical Studies of the Domestic Group*, University of California Press.

Pahl, Raymond E. (1984) *Divisions of Labour*, Basil Blackwell.

Pahl R.E. and Wallace C. (1985) 'Household Work Strategies in Economic Recession', in Redclift N. and Mingione E.(eds.) , *Beyond Employment*, Basil Blackwell.

Pickvance C. & Pickvance, K. (1994) 'Towards a Strategic Approach to Housing Behaviour: A Study of Young People's Housing Strategies in South-East England', *Sociology* Vol.28, No.3, pp. 657-677.

Pile, S. (1991) 'Securing the Future:'Survival Strategies' amongst Somerset Dairy Farmers', *Sociology* Vol.25 : No.2, pp. 255-274.

Portes, A., Castelles, M. and Benton L. (eds.) (1989) *The Informal Economy*, Johns

Hopkins.

Quataert, Jean H. (1995) 'Survival Strategies in a Saxon Textile District during the Early Phases of Industrialization, 1780-1860', in D. H. Hafter (ed.), *European Women and Pre-industrial Craft,* Indiana UP.

Ram, M. and Wong, R. (1994) 'Covariates of Household Extension in Rulal India : Change Over Time', *Journal of Marrige and the Family* 56, Nov., pp.853-864.

Rank, M. R. (1994) *Living on the Edge: The Realities of Welfare in America*, Columbia UP.

Rasmusen, E. (1989) *Games and Information: An Introduction to Game Theory*, Blackwell.（細江守紀ほか訳、『ゲームと情報の経済分析』I、九州大学出版会、1990年）

Redclift, M. (1986) 'Survival strategies in rural Europe: continuity and change', *Sociologia Ruralis*, XXVI-3／4, pp.218-227.

Roberts, Bryan R. (1991) 'Household Coping Strategies and Urban Poverty in a Comparative Perspective', in M. Gottdiener and Chris G. Pickvance (eds.), *Urban Life in Transition* (Vol.39, Urban Affairs Annual Reviews), Sage.

Roberts, B. R. (1994) 'Informal economy and family strategies', *International Journal of Urban and Regional Research*, Vol.18, No.1, pp.6-23.

Rose, S. O. (1992) *Limited Livelihoods*, University of California Press.

Rosenbaum, E. and Gilbertson, G. (1995) Mother's Labor Force participation in New York City: A Reappraisal of the Influence of Household Extension', *Journal of Marriage and the Family* 57 (Feb), pp.243 – 249.

Saraceno, C. (1989) 'The Concept of Family Strategy amd Its Application to the Family-Work Complex: Some Theoretical and Methodological Problems', *Marriage and Family Review* Vol.14, Nos.1／2, pp.1-18.

Schmink, M. (1984) 'Household Economic Strategies: Review and Research Agenda', *Latin American Research Review*, 19 (3), p.88.

Schoroeder, R. & Watts, M. (1991) 'Struggling over Strategies, Fighting over Food: Adjusting to Food Commercialization among Mandinka Peasants', in Clay and

Schwarzweller (eds.).

Scott, John (1982) *The Upper Classes: Property and Privilege in Britain*, Macmillan.

Segalen, Martine (1981) *Sociologie de la Famille*, Libraire Armard Colin. (片岡陽子ほか訳、『家族の歴史人類学』、新評論、1987年)

Selden, M. (1993) 'Family Strategies and Structures in Rural North China', in Davis and Harrel (eds.).

Shaw, M. (1990) 'Strategy and Social Process: Military Context and Sociological Analysis', *Sociology* Vol.24 : No.3, pp. 465-473.

Shulman, Michael D. and Cotten, Shelia R. (1991) 'Saving the Farm: Strategies for Success or Distress', in Clay and Schwarzweller (eds.).

Smith, D. S. (1987) 'Family Strategy: More than a Metaphor?', *Historical Methods,* Vol. 20, No. 3, pp.118-120.

Smith J. and Wallerstein, I. (1992) *Creating and Transforming Households*, Cambridge.

Stack, Carol B. (1974) *All Our Kin: Strategies for Survival in a Black Community*, Harper.

Stockard, J. E. (1989) *Daughters of the Canton Delta: Marrige Patterns and Economic Strategies in South China*, Stanford UP.

Tilly, Louise A. (1979a) 'Individual lives and family strategies in the French Proretariat', *Journal of Family History* IV, Summer, pp.137-152.

Tilly, L. (1979b) 'The Family Wage Economy of a French Textile City: Roubaix, 1872-1906', *Journal of Family History* IV, Winter, pp.381-394.

Tilly, L. (1984) 'Linen was their life: family survival strategies and parent-child relations in nineteenth-century France', in Hans Medick & David Warren Sabean (eds.), *Interest and Emotion: Essays on the study of family and kinship*, Cambridge UP.

Tilly, L. (1987) 'Beyond Family Strategies, What ? ', *Historical Methods*, Vol. 20, No. 3, pp.123-5.

Tilly, L. & Scott, J. W. (1978) *Women, Work and Family*, Routledge. (New Edition, 1987)

Tilly, Chris and Tilly, Charles（1994）'Capitalist Work and Labor Markets', in Smelser, N. J. et al.（eds.）*The Handbook of Economic Sociology*, Princeton UP.

Wallace, C.（1993）'Reflections on the concept of 'strategy'', in D. Morgan and L. Stanley（eds.）, *Debates in Sociology*, Manchester.

Warde, Alan（1990）'Household Work Strategies and Forms of Labour: Conceptual and Empirical Issues', *Work, Employment and Society*, Vol.4, No. 4, pp.495-515.

Watson, W.（1990）'Strategy, Rationality and Inference: The Possibility of Symbolic Performances', *Sociology* Vol.24 : No.3, pp. 485-498.

Whyte, M. K.（1993）'Wedding Behavior and Family Strategies in Chengdu', in Davis and Harrel（eds.）.

Wolf, Diane Lauren（1991）'Does Father Know Best ? : A Feminist Critique of Household Strategy Research', in Clay and Schwarzweller（eds.）.

Wolf, D. L.（1992）*Factory Daughters: Gender, Household Dynamics. and Rural Industrialization in Java,* University of California Press.

Woolf, Stuart（ed.）（1991）*Domestic Stratigies: work and family in France and Italy 1600-1800,* Cambridge UP.

Wright, David（1998）'Family Strategies and the Institutional Confinement of 'Idiot' Children in Victorian England', *Journal of Family History* 23（2）, pp.190-208.

Yanagisako, S. J.（1985）*Transforming the Past: Tradition and Kinship among Japanese Americans,* Stanford UP.

Zelizar, V. A.（1985）*Pricing the Priceless Child: The Changing Social Value of Children,* Basic Books.

大橋照枝（1993）『未婚化の社会学』、日本放送出版協会.

落合恵美子（1994）「息子の再分配－養子慣行の歴史人口学的分析」第67回日本社会学会大会における報告.

北村暁夫（1994）「移民における家族の戦略－南イタリアの研究事例から」『思想』第842号、82-102頁.

小井土彰宏（1997）「国際移民システムの形成と送り出し社会への影響」小倉充夫編『国際移動論』三嶺書房.

小島宏（1990）「P.ブルデューの「出生力戦略」の人口学的評価」『人口問題研究』第45巻第4号、52-58頁.

小島宏（1995a）「家族戦略と家族政策－母親の就業と保育方法をめぐって」 第27回比較家族史学会大会における報告.

小島宏（1995b）「結婚、出産、育児および就業」大淵寛編『女性のライフサイクルと就業行動』、大蔵省印刷局.

坂井素思（1992）『家庭の経済』、放送大学教材.

坂本佳鶴恵（1994）「高齢期の家族戦略－首都圏調査の分析より」 第67回日本社会学会大会における報告.

島田晴雄・清家篤（1992）『仕事と暮らしの経済学』岩波書店.

盛山和夫（1997）「合理的選択論」井上俊他編『現代社会学の理論と方法』岩波書店.

田渕六郎（1996）「主観的家族論」『ソシオロゴス』20、19-38.

田渕六郎（1998）「家族構造とエスニシティ」『人文学報』（社会福祉学）291、69-108. 東京都立大学人文学部.

田渕六郎（近刊）「家族の理論研究とその枠組み」野々山久也・渡邊秀樹編『家族社会学入門』文化書房博文社.

西野理子（1998）「「家族戦略」研究の意義と可能性」丸山茂他編『家族のオートノミー』早稲田大学出版部.

平野敏政（1994）『現代社会と家族的適応』慶応通信.

丸山茂（1986）「家族のストラテジー－ピエール・ブルデューの家族研究」『判例タイムズ』第608号、18-23頁.

森岡清美（1972）「家族の変動」、同編『家族社会学』（社会学講座3）、東京大学出版会.

山田昌弘（1994）『近代家族のゆくえ－家族と愛情のパラドックス』新曜社.

（注）本稿は、第68回日本社会学会大会（於：東京都立大学）一般研究報告（1995年9月24日）における当日配布原稿を、若干の文献追加と字句の微修正を中心に改稿したものである。